はじめに

中学生たちの悩みや望みを生きた姿でとらえ，それを報告する目的で出発した「モノグラフ・中学生の世界」は，教育関係者はじめ，多くの方々の支持を受け，昨年10月の「非行文化をめぐって」vol.4 に続いて，今春「学業不振とその背景」vol.5 として刊行できることになった。

この間，生徒たちのなまの声を聞き，そうした声を素材として，身近なところから教育改革の手がかりをつかもうとする態度をとり続けてきた。

今までの「モノグラフ・中学生の世界」は，題名の通り中学生の問題に焦点をしぼっていた。しかし，これまで高校関係者からも，高校生を対象とした報告書を作れないかという要望が寄せられていた。そこで1年間に及ぶ準備期間を経て，そうしたご希望に答えようとして作成したのが，この「モノグラフ・高校生'80」である。

今回は，第1号ということもあって，概説風に「高校生の描く未来像」を分析のテーマに定めた。調査実施にあたって，多くの高校の先生方，生徒諸君の協力を仰いだ。厚く謝意を表したいと思う。

最後になったが「モノグラフ・中学生の世界」と同じように「モノグラフ・高校生'80」の実施・刊行について，福武書店の全面的なご協力を得た。㈱福武書店社長・福武哲彦氏，高校通信教育部次長・佐藤信氏をはじめ，福武書店の関係者の方々に感謝の気持を述べておきたい。

なお，「モノグラフ・高校生'80」は，とりあえず，年に2回の調査実施を予定しており，現在「高校生文化」，「高校間格差」，「高校生の描く家庭観」などを候補に，次回の調査票作成に入っている。今後，とりあげて欲しいテーマなどを，お持ちの方は，㈱福武書店　高校通信教育部・調査室まで，お知らせいただきたい。

昭和55年1月

高校教育研究会

代表　奈良教育大学教授　深谷　昌志
東京学芸大学助教授　深谷　和子
武蔵大学助教授　武内　清
千葉大学専任講師　明石　要一
東京大学大学院　耳塚　寛明
東京大学大学院　樋田大二郎
東京大学大学院　苅谷　剛彦

なお，本調査実施にあたり，全員で調査票の検討を行った後，主として，武内清，深谷和子，深谷昌志が，調査票のとりまとめを行い，明石要一がデータの打ち出しを担当した。なお，本報告書の執筆は，深谷昌志が担当した。

本報告書の要約

❶ 本調査のサンプルは，北海道から宮崎へいたる９校の高１～高３の4,582名（内男子3,123名，女子1,459名）である（表１）。

❷ 各県のトップ・ランクおよびそれに準ずる高校を調査対象としたので，ほぼ65％の者が，小・中学生時代，トップの成績を修めた「黄金の時」を持つ子どもであった（表２）。

❸ しかし，高校へ入ると自分よりはるかに優秀な生徒がいるのに気づく。そのため，学業成績の現状に満足しているのは５％で，半数を越える生徒が不満足な成績だと認めていた（表４）。

❹ そうした状況を反映してか，現状の生活にしあわせを感じている者は46.0％で，16.7％が，ふしあわせだと訴えていた（図２）。

❺ 進学率の高い高校に在籍しているためか，生徒たちは大学進学率の全国平均を58.5％と，実際の数値より２倍近く多く予想していた。

❻ トップ・ランクまたは，それに準ずる高校に在籍している生徒でも，東大などを受けた場合，「ぜったい入学は無理だ」と思っている者が，77.8％に達した（表13）。

❼ しかも，一学期の中間試験と期末試験を受けただけの一年生でも，48.6％は「どんなに努力をしても東大へ入れそうもない」と考えている（表16）。

❽ いわゆる一流大学の入試に自信を持つ生徒は，学業成績が上位

1割程度の生徒に限られていた（表17）。

❾ 進路選択のタイプは4つに分かれたが,「一流大学志向型」は約2割で，どこの大学でも入れればよいという「あきらめ型」が3割を占めた（図5）。

❿ 大会社の社長や名医，教授などのビッグな目標へとても到達できないと思っている生徒は6～7割を数えた（表20）。

⓫ ビッグな目標を断念した生徒にとって,「なってもよいし，なれるかもしれない」職業の代表は地方公務員である（表21）。

⓬ 結婚の形として，恋愛結婚を望む者が97.2%に達した。しかも，76.1%が親の反対を押し切っても，その人と結婚したいと考えていた。

⓭ 男子のみを対象とした結果では，専業主婦の妻を求める割合が81.1%に達した

⓮ 多くの生徒たちはエリートとしての職業的な成功を断念し，暖かい家庭作りに希望を託していた。しかし，そうした家庭を作れると信じているのは，学業成績の良い生徒に限られていた(図9)。

⓯ なお，結婚後親もとから「歩いて10分位」のスープのさめない所に家庭を作りたいと答えた者が44.4%に達した。

Ⅰ　高校生たちの現在

1．サンプルの概要

1）　調査目的

淘汰機関としての高校教育

現在，高校に在学する生徒は，全国で440万人に達する。そして，高校進学率も，昭和49年の90.8%から，50年の91.9%，51年92.6%，53年93.1%のように，飽和状態に近づきながらも，上昇を続け，昭和54年には93.5%に達した。高校進学率が9割を割っているのは，沖縄（86.1%）と岩手（89.3%）の2県のみで，進学率が93%以上の都道府県は30を数える。

これらのデータをもとにすると，現在の高校教育は半ば義務教育化した感が強い。しかし，そうした半面，高校進学にあたって，偏差値によるふるい分けが徹底し，学力を尺度とした学校間の格差は，いっそう顕著になりつつある。したがって，一口に「高校」といっても，進学予備校のような性格を持つ学校から，非行化予防施設のような学校まで，さまざまな内情を含んでおり，平均的な高校生像をつかみにくいのが現在の高校教育なのかもしれない。

制度的に，たてまえの上では高校進学の機会は誰にも保証されるようになった。しかし，学力群により入学先が決定され，さらに，入学後も学力競争を重ね，その成果によって進路が決定される。そうした実態を考えると，現在の高校教育は学力による淘汰機関といえなくもない。

子どもたちのしあわせを願って実現されてきた高校教育の普通化が，皮肉なことに

学力競争を全国レベルにまで波及させる事態を招き，その結果としてかならずしも（狭義での）知的な情報の摂取に適性を持たない生徒たちが，不必要なひけめを感じて毎日を送るようになる。グッドマン（P. Goodman）が，『不就学のすすめ』Compulsory Mis-Education（片岡徳雄監訳，福村出版）の中で指摘した「学校教育の非教育性」が，遠く離れたアメリカの話と思えなくなる。

サンプル構成

そうした考察は，あらためてまとめの段階でふれるとして，そろそろ本論に入ろう。

高校受験を終えて，一息つく間もなく大学進学のための勉強に追われる高校生たち。彼らは，何を考え，どんな目標をめざして，毎日を送っているのか。高校生たちの生きた声を聞きたい。中でも，将来の進路をどう考えているかを尋ねたい。そうした気持で作成したのが，巻末に付した調査票である。

調査票は，大別して，

① 高校入学まで……設問 2～3
② 現状について……設問 4～8
③ 進路選択……設問 10～16
④ 大学についての知識……設問 17～18
⑤ 将来の職業生活……設問 19～25
⑥ 将来の家庭生活……設問 26～31

の6領域を骨子としている。

なお，サンプル校の選定にあたっては，現在の高校教育は大学進学の問題を避けて通れないという判断から，とりあえず進学校に対象を限定した。サンプル講成は表1の通りである。

調査は，昭和54年9～10月に実施し，同年12月，集計事務を完了した。なお，調査にご協力いただいた学校と生徒諸君のプライバシーを守るために，以下の分析にあたっては，サンプルをトータルとして扱う考察を主とし，学校別の分析が必要な場合でも，A校・B校のような扱いをすることにした。

2） 高校進学まで

「入学したかった高校」という反応が9割

高校生たちが，どのような未来像を描いているのかを明らかにするのを，本報告書の狙いとしているが，それにふれる前に，本調査に協力してくれた生徒層を理解するために，彼らが，どのようなキャリアをたどって現在を迎えたのかを簡単にふれておきたい。

表2に示したように，4割近い生徒たちが，小・中学校時代を通して，クラスでトップの成績をとったと答えており，これに「40人のクラスで，4～5番」の者を加え

表1　サンプル構成

高　校　名	1　年	2　年	3　年	計
（北海道）A高校	435	431	427	1，293
（岩　手）B高校			276	276
（宮　城）C高校	276			276
（東　京）D高校		255	196	451
（愛　知）E高校	346		112	458
（石　川）F高校		367	357	724
（岡　山）G高校			410	410
（福　岡）H高校			342	342
（宮　崎）I高校	352			352
男　　子	944	752	1,427	3,123
女　　子	465	301	693	1,459
計	1,409	1,053	2,120	4,582

※ただし，本文中のアルファベットとは，いっさい関係ありません。

表2　小・中学生時代の成績

（%）

	40人のクラスだとして					
	トップの方	4～5番	10番位	まん中位	中の下位	うしろの方
①　小学 5～6年生の頃	38.1	27.4	14.2	12.7	4.0	3.7
②　中学 1～2年生の頃	35.0	28.8	15.7	11.4	6.5	2.6

ると，成績優秀であった者の占める割合は6割に達する。すでに紹介したように，本サンプルの在籍する学校は，その地域のトップまたはそれに準ずる高校であるから，当然，そうした高校へ入学できた彼らが，小・中学生時代を通して，その学級や学校を代表する学業優秀児であったのはたしかであろう。つまり，小学生の頃から，学業の面で「黄金の時」golden days を持った子どもたちなのである。

事実「あなたが，現在入学している高校は，あなたが初めから入学したかった学校ですか」の設問に対する回答は，

① ぜひ入学したかった学校……39.7%
② まあ入学したかった学校……50.9%
（小計　90.6%）
③ あまり入学したくなかった学校…… 6.4%
④ ぜんぜん入学したくなかった学校…… 3.0%
（小計　9.4%）

の通り，９割の生徒が入学を希望した学校だったと答えている。

なお，学校別集計をみると，明治20年代に創設されて以来，県下のナンバー１中学であり，現在も高進学率を誇るＡ校は，57.9%，Ｂ校は56.3%。また，新設校ながら，ここ数年一流大学入学者が増加し，東大入学者数でもベスト10の常連となったＣ校は51.8%。これらは，それぞれの学校の生徒が「ぜひ入学したかった」と答えた割合である。

また，学年・男女別に「ぜひ入学したかった者」の割合を示すと，

	男　子	女　子
1　年	34.9%	44.9%
2　年	32.6%	40.5%
3　年	39.9%	50.4%

のように，学年差は，ほとんど認められなかった。つまり，県下のリーディング高校へ入学できたという感激は，入学当初だけでなく，２年，３年と，上級学年になっても持続している。

入学を希望した学校へ入れたのであるから，当然のことながら在籍している高校に

表３　高校についての評価

（%）

	そう思う			はんぶんはんぶん	そう思わない		
	とても	まあ	(小計)		あまり	ぜんぜん	(小計)
① 大学進学に意欲をもやしている生徒が多い	40.6	36.7	(77.3)	13.5	5.0	4.2	(9.2)
② 非行をする生徒が少ない	30.7	48.4	(79.1)	12.0	6.1	2.8	(8.9)
③ 学校全体がのびのびとしている	24.3	34.1	(58.4)	21.7	13.2	6.7	(19.9)
④ まじめに勉強をする生徒が多い。	22.3	36.1	(58.4)	26.5	11.5	3.6	(15.1)
⑤ 高校に誇りを持っている生徒が多い。	14.7	31.4	(46.1)	29.6	17.6	6.7	(24.3)
⑥ 学校のふんい気がよい	13.0	41.7	(54.7)	25.3	12.6	7.4	(20.0)
⑦ 熱心な先生が多い	12.6	34.4	(47.0)	31.4	15.0	6.6	(21.6)

対する評価もきわめて良好で（表３）「大学進学に意欲をもやしている生徒が多い」や「非行をする生徒が少ない」という意見を肯定する者が８割に近い。

高校生活を「灰（High）色の生活」というのは，現在では陳腐ないいまわしになってしまったが，将来に希望を見出せずに意欲を喪失し，時には非行へ走る。そうした生徒を数多くかかえる高校が少なくないといわれる。しかし，本サンプルの高校は大学進学に意欲を燃やし，まじめに勉強する者が多く，そして，非行する生徒などの少ない学校らしい。

２．高校生活の満足度

1）　学業成績との関連で

成績に満足しているのは５％

今までのデータを通して，生徒たちがどのようなキャリアをたどって現在を迎えたのかの概要は，把握できたように思う。そうした彼らは，現在どのような気持で高校生活を送っているのであろうか。

まず，表４に目を通して欲しい。学校生活についての領域別の満足度が示すように「友だちとうまくやっているし，放課後もまあ満足できる生活をしている。先生との関係も，満足とはいいがたいが，特に不満はない。ただ，学業成績だけは不満足だ。」というのが，生徒たちの平均的な反応のようであった。特に

表４　学校生活に対する満足度

（%）

学校生活に対して	満足			不満足		
	とても	かなり	やや	やや	かなり	とても
① 友だちとの関係	9.8	28.6	38.7	14.9	4.1	3.9
	38.4		53.6		8.0	
② 放課後の余暇生活	8.7	14.6	31.9	26.4	10.2	8.2
	23.3		58.3		18.4	
③ 先生との関係	2.5	8.6	42.2	28.0	9.6	9.1
	11.1		70.2		18.7	
④ 学業成績	1.7	3.0	12.8	28.8	28.3	25.4
	4.7		41.6		53.7	

表5　学業成績に対する評価

(%)

	トップの方	上位から10%位	上位から1／3位	まん中位	中の下位	うしろの方
① 英　語	3.7	8.7	16.6	26.4	19.1	25.5
② 数　学	3.0	9.1	17.9	24.8	21.8	23.4
③ 国　語	2.6	7.8	18.4	32.9	20.0	18.3
④ 社　会	2.8	8.2	17.7	30.8	21.2	19.3
⑤ 理　科	2.4	7.9	16.9	30.3	21.7	20.8

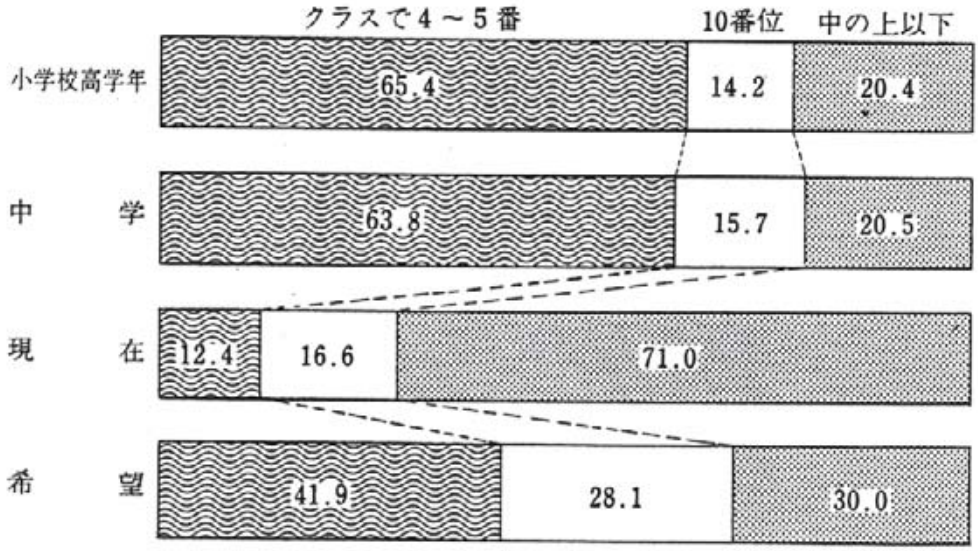
学業成績について一応の満足感をあらわした生徒は，わずかに5%弱で，半数を越える生徒が不満だと答えている。

そこで，もう少し学業成績についてくわしい自己評価を求めると，表5の通りとなる。教科を越えて,「上位10%に入る」と自認できる生徒は約1割で，4割以上の生徒が，現在の自分の成績を「中の下以下」と評価している。

すでにふれたように，それぞれの地域でトップ・ランク及びそれに準ずる高校に在籍している生徒たちであるから，小・中学生時代，成績に自信を持っていたのに，高校へ入ってみたらもっと強力なライバルがいたというべきか，7割の生徒が「中の上」以下の成績にとどまっている。

もっとも，入学した学校がトップ・ランクの高校であろうと，入学してしまえばその学校内部で成績が競われる。したがって，中位や下位の成績をとる生徒が生まれるのは避けられない。しかし，図1のように彼らの大半が，小・中学校時代に「黄金の

図1　学業成績の推移



時」をもっていただけに，学級集団の中で下位の成績をとるのは初めての体験である。それだけに，成績不振のもたらす屈辱感は大きいと予想されよう。

もっとも，彼らは「努力をすれば」もう少し良い成績をとれるだろうと考えている。上位1割に入れると信じている生徒が，4割を数える（表6）。しかし，表6はサンプルをトータルとしてとらえた場合の反応なので，これを現在の成績別に集計し直すと，表7のようになる。

①上位1/3の生徒──→上位1割へ
②まん中位の生徒──→上位1/3へ
③中の下位の生徒──→せめてまん中へ

このように，どの生徒もせめてもう1ランク良い成績をとりたいと考えている。

学業成績はつねに満たされない

となると，成績が中位以下の生徒が学業の現状に満足感を持てないでいるのは十分に予想されよう。

表8に示したように「まん中位」の生徒の約5割「中の下」だと6割，そして「うしろの方」では，4人の内3人が現在の成績に「かなり」あるいは「とても」不満足だと答えている。それと同時に，この結果の中で興味をひくのは，上位10%の生徒でも，成績に満足感を持っている者が14.2%にとどまっている事実であろう。成績が良ければ良いで，

表6　努力をすれば，どの位の成績をとれるか

（%）

	トップの方	上位から10%位	上位から1/3位	まん中位	中の下位	うしろの方
① 英　語	18.3	23.6	28.1	18.8	8.0	3.3
② 数　学	18.2	24.2	26.7	18.8	8.3	3.7
③ 国　語	15.2	21.6	32.8	19.8	7.0	3.6
④ 社　会	19.7	25.5	29.1	17.8	5.1	2.7
⑤ 理　科	18.3	23.4	30.0	18.9	5.9	3.4

表7　今の成績と努力目標

(%)

今の成績 ＼ 努力すれば期待できる成績	上位10%まで	上位から1／3	まん中位	中の下位	うしろの方
①上位10%まで	98.9	0.2	0.0	0.4	0.5
②上位から1／3	83.3	16.1	0.5	0.1	0.0
③まん中位	31.9	60.7	7.0	0.1	0.3
④中の下位	16.8	35.6	45.0	2.0	0.6
⑤うしろの方	15.7	10.4	32.7	29.3	11.9

表8　今の成績と学業成績の満足度

(%)

今の成績 ＼ 成績の満足度	満足			不満足		
	とても	かなり	やや	やや	かなり	とても
① 上位10%まで	4.9	9.3	26.5	30.4	16.7	12.2
	14.2		56.9		28.9	
② 上位から1／3	1.0	5.2	20.6	37.8	22.6	12.8
	6.2		58.4		35.4	
③ まん中位	0.9	2.3	13.3	34.0	31.4	18.1
	3.2		47.3		49.5	
④ 中の下位	0.5	1.4	6.5	29.1	35.8	26.7
	1.9		35.6		62.5	
⑤ うしろの方	2.6	0.6	4.9	16.2	29.6	46.1
	3.2		21.1		75.7	

もっと上位を目指さねばならない。学業成績というのは，つねに満たされぬ思いを伴うものなのかもしれない。

2) しあわせを規定する要因

今がしあわせの薄い時

このように，志望した高校に入れ，友だちもでき，学業成績を除くとおおむね順調というのが，生徒たちの現状であった。そこで，生徒たちに「あなたは，今，しあわせですか」と尋ねてみた。

下記のように，「しあわせ」と答えた生徒は半数以下にとどまっていた。

とてもしあわせ	7．7	46．0％
かなりしあわせ	16．1	
ややしあわせ	22．2	
ふつうぐらい	37．3％	
ややふしあわせ	9．4	16．7％
かなりふしあわせ	4．2	
とてもふしあわせ	3．1	

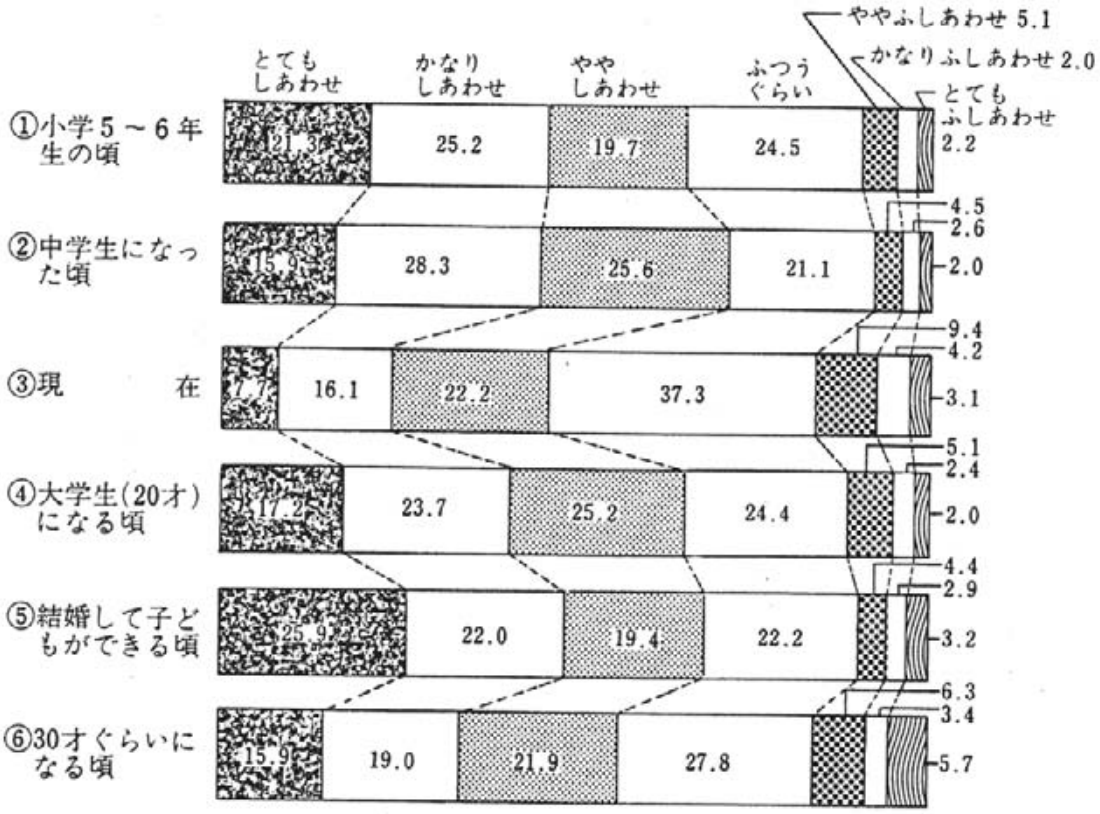
昭和54年7月，東京や大阪・諏訪・大津などの6地点を選んで，小学6年生と中学2年生，計2,500名に子どもたちの未来像を尋ねる調査（深谷昌志・和子「子どもの描く未来像」日本教育社会学会第31回発表資料）を試みた。その調査の中で，今回の高校生調査と同じワーディングで，子どもたちのしあわせ度を調べている。そこで，前述の数値の意味を理解するために，参考までに，結果の一部を引用すると以下の通りとなる。

	小 6	中 2
とてもしあわせ	36．7％	21．8％
かなりしあわせ	21．5	21．8
ややしあわせ	14．8	19．7
ふつうぐらい	22．0	28．5
ややふしあわせ	3．5	4．9
かなりふしあわせ	0．7	1．3
とてもふしあわせ	0．8	2．0

「とても」～「やや」しあわせ組が，小6の73％から，中2の63％を経て，高校生の46％へ，また，現状を「ふしあわせ」と思っている子は，小6の5％から中2の8％を経て，高校生の17％へという推移である。

高校生ともなれば思い悩むことも多くなるから，小学生の頃のように単純にしあわせを味わいにくくなるのは，人間としての成長を示す証しなのかもしれない。それにしても「ふしあわせ」と答えた生徒が，16.7％に達したのが気がかりである。

図2　しあわせ感の推移



そこで，生徒たちにしあわせ感の過去を回顧，そして，未来を予想させたところ，図2のような結果が得られた。子どもの頃はしあわせであったし，将来もまた，しあわせの時を迎えることができる。しかし，今がもっともしあわせの少ない年齢という把握である。

将来に希望を持てれば

とはいっても，現在，しあわせ感を味わっている生徒は46%を数えるのであるから，高校生全体をしあわせの少ない集団とみなすことはできない。そこで，しあわせ感を規定する要因分析を，数量化II類を利用して試みると図3の通りとなる。数量化になじみの薄い方もおられると思うので，この図の見方の説明をしておくと，1)の「学年・性」から9)「父の学歴」までの9つの変数（アイテム）を使って，しあわせ感を規定する要因を説明しようとするもので，規定力は，カテゴリー・スコア〔図中の1）－1年女子の下にある1.34〕の形であらわされる。なお，プラスのスコアが大きいほど，しあわせ感が促進されることを，逆にマイナスの数値がふえるほどふしあわせ感が増すことを意味する。

図3　しあわせ感を規定する要因

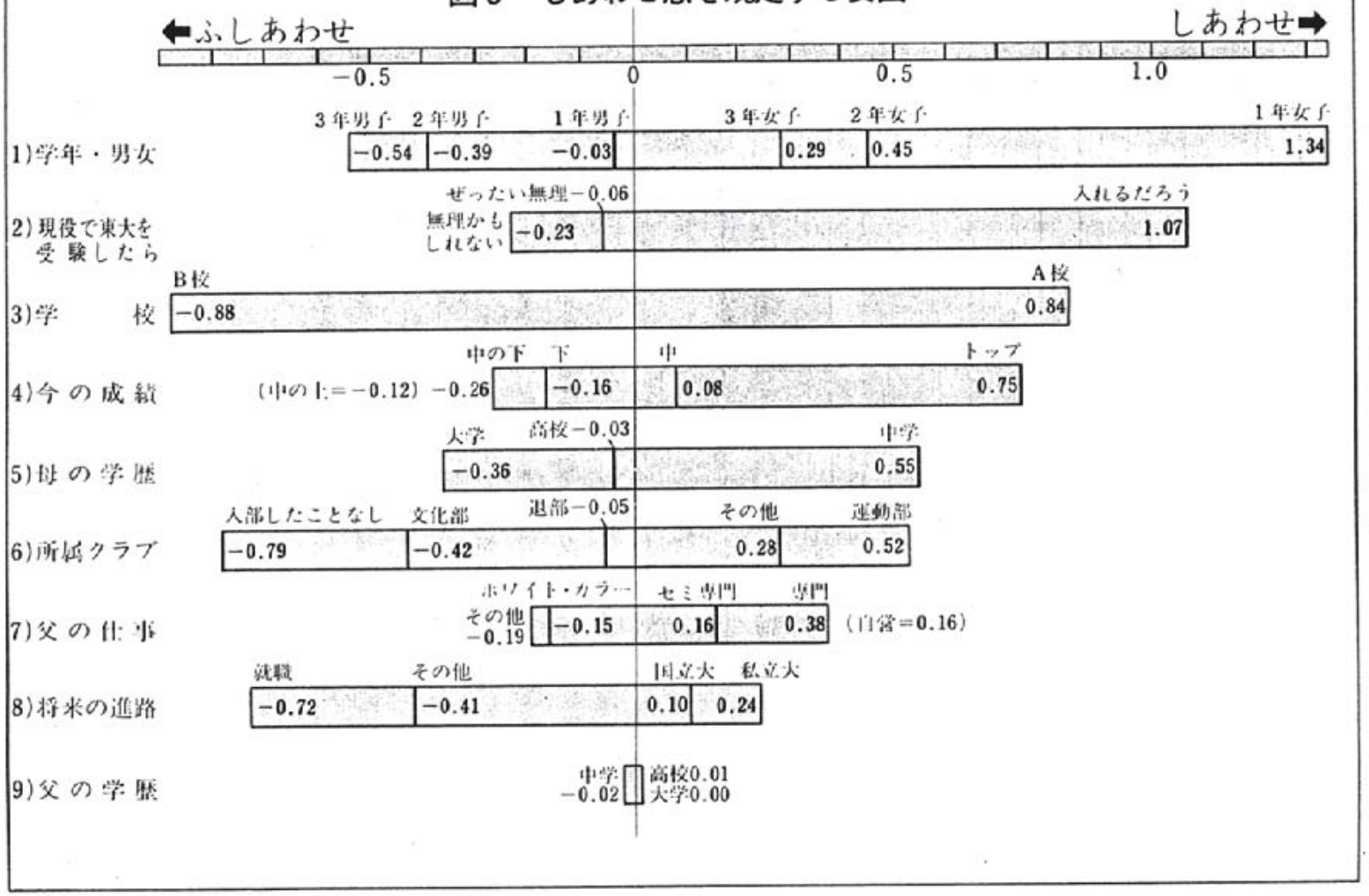


図3について多くの解釈が可能だが，大づかみにすると以下のような解釈がなりたとう。

① 1年，2年，3年と学年が上がるにつれて，しあわせ感が薄れる。

② 男子より女子の方が，しあわせだと感じる割合が大きい。

③ 現役で東大などへ入れそうだと思える者は，しあわせだと感じている。

④ 学業成績がトップ層の生徒はしあわせを感じる割合が高い。

⑤ 総体的に，生徒たちがしあわせを感じられる学校とそうでない学校との間の学校間格差は大きい。

高学年になるにつれて大学進学がさしせまってくる。それだけに全体としてみると，学年が上がるにつれてしあわせ感が減少していく。そうした中で一流大学へ入学できそうだと信じられる良い成績をとる生徒たちは，未来に希望を見出せるからしあわせ感を失わずにすむ。しかし，そうした自信を持てる生徒は，たかが1割を越える程度にすぎないので，その他の大多数の生徒たちは自信を喪失して，ふしあわせな気分に陥っていく。なお，女子のしあわせ感が，男子を上回っているのは，大学進学に伴う緊迫感が男子ほど厳しくないため，換言するなら，なんとしても，一流大学へ入らねばというような緊張感を抱かないですむためと考えられる。

II　大学選択をめぐって

1．ムードとしての進学

1）　進学についての情報取得度

8割が4年制大学志望

このように，高校生たちの心に大学進学の問題が重くのしかかっているのは確かだが，あらためて，生徒たちの希望している進路を紹介すると，

① 4年制国立大学……70.7%
② 4年制私立大学……11.6%
③ 専修学校…… 4.5%
④ 短大…… 3.3%
⑤ その他の進学…… 1.2%
⑥ 就職…… 2.0%
⑦ 家業の手伝い…… 0.1%
⑧ 未定…… 6.6%

の通りで，82.3%が，4年制大学進学を予定している。なお志望学部別の集計結果は

① 法学部・経済学部……19.6%
② 理学部……16.7%
③ 工学部……16.2%
④ 文学部……15.4%
⑤ 教育学部……14.9%

⑥ 医　学　部　　6.7%
⑦ 家政学部　　1.7%
⑧ そ　の　他　　8.8%

である。

4年制大学だけで8割強，短大を含めると9割近い生徒が，大学進学を予定している。彼らは，大学に何を求めて進学しようとしているのか。それを考える手がかりとして，生徒たちに大学教育についてどの程度の知識を持っているのかを尋ねることにした。

進学率の全国平均は58.5%—生徒の予想

まず「この2～3年，大学（短大を含む）へ進学する人は，該当年齢（18～20歳位）の何%位だと思いますか」と設問してみた。生徒たちにとっては考えたこともない質問だったらしく，進学率の予想は10%から90%までの広い範囲に及んでいたが，

① 0 ～ 19%　　1.6%
② 20 ～ 29%　　2.7%
③ 30 ～ 34%　　6.3%
④ 35 ～ 39%　　2.4%
⑤ 40 ～ 49%　　15.1%
⑥ 50 ～ 59%　　15.5%
⑦ 60 ～ 69%　　20.0%
⑧ 70 ～ 79%　　16.2%
⑨ 80 ～ 89%　　13.2%
⑩ 90 ～ 100%　　7.0%

平均値　58.5%
S・D　0.29
※S・D＝標準偏差　集団全体の得点のちらばりの度合を示す。

の通り，平均すると，該当年齢の58.5%が大学進学をしているというのが生徒たちの回答であった。

ちなみに，このクイズの正解は昭和50年の33.8%をピークに，大学・短大の該当年齢別進学率は51年33.0%，52年33.0%，53年32.5%と，ゆるやかな下降線を描いているから，おおむね3割強というところであろう。しかし，本サンプルの場合，大学進学率の高い高校に在籍しているためか，実際の倍近く，高校生の6割が大学を目指すものと錯覚している。大学には誰でもが進学するというイメージである。

諸外国の進学率予測—40～54%

大学進学率が6割という数値にも，生徒たちがたしかな情報をもとにするというより，一種のムードとして，みんなが大学へ進むから自分も進学するというような気配が感じられるが，進学率についてはもう少し別の角度からの設問を試みている。

まず「次の国の大学進学率は，現在，およそ何％位だと思いますか」の設問に対する回答の平均値は，

①	アメリカ	54.0％	(45.2％)
②	イギリス	50.4％	(20.3％)
③	フランス	46.7％	(24.4％)
④	ソビエト	40.1％	(－)

( ) 内は，実際の数値，アメリカは1975年，イギリス1975年，フランス1977年，ソビエトの資料は入手できなかった。

の通りであった。

アメリカの社会学者，マーチン・トロウ（M.A.Trow）は，大学進学率が15％までの大学の機能を「エリート型」，15～50％までを「マス型」，50％以上を「ユニバーサル型」と名づけている（天野・喜多村訳『高学歴社会の大半』ＵＰ選書)。そして，イギリスなどの西欧諸国の大学が第一の段階，そして，日本が第二段階，アメリカは第三の段階へ入ったと考えて，誰でも好きな時に自由に出入りできる機関として，ユニバーサル型の大学の未来像を描いている。

こうしたトロウの指摘を待つまでもなく，該当年齢の５割以上が在籍している教育機関ともなれば，普通教育機関化の傾向は避けられない。もちろん，高校生たちがそうした知識を正確に持っている必要はないが，それにしても，日本の現状といい，諸外国に対する評価といい，生徒たちは大学進学率が５割を上回ると考えているから，自分の進路についても進学を自明のコースと考えているのは，当然の帰結であろう。

なお「日本の場合，以下の頃の大学進学率はおよそ何％位だったと思いますか」の問いに対して，生徒たちの回答した平均値の高さは，以下の通りであった。

①	大正の中頃	10.7％	(1.0％)
②	昭和10年頃	16.5％	(3.0％)
③	昭和30年頃	29.4％	(9.0％)
④	昭和40年頃	43.8％	(17.0％)

※ ( ) 内は，実際の数値

2） 学歴の効用に対する評価

学歴の効用は「やや下がる」が41.5％

高校生の大半が大学へ進学すると考えている生徒たちは，それでは，学歴の効用をどのように考えているのだろうか。

「一流大学を卒業したという値うちは，これからの世の中で，どう変わっていくと思いますか」についての評価は，

①	これからますます値うちが上がる	12.6％
②	今までと変わらない	35.0％
③	これからやや下がると思う	41.5％
④	これからぐんと下がると思う	10.9％

表9　学歴の効用についての予測

(%)

		値うちが上がる	今までと変わらない	やや下がる	ぐんと下がる	(小　計)
男子	1　年	15.9	31.3	40.8	12.0	52.8
	2　年	10.9	33.2	41.8	14.1	55.9
	3　年	13.2	36.2	38.1	12.5	50.6
女子	1　年	13.7	31.5	46.7	8.1	54.8
	2　年	10.8	37.5	43.3	8.4	51.7
	3　年	9.0	40.2	44.5	6.3	50.8
学業成績	トップ	11.7	34.1	40.5	13.7	54.2
	中の上	13.2	38.4	40.6	7.8	48.4
	中	12.6	34.1	44.1	9.2	53.3
	中の下	12.0	36.6	39.9	11.5	51.4
	ラスト	12.0	32.8	41.6	13.6	55.2
つきたい仕事	専門職	12.8	36.8	39.4	11.0	50.4
	セミ専門職	13.7	37.0	38.3	11.0	49.3
	ホワイト・カラー	10.8	35.7	43.9	9.6	53.5
	自営	11.4	31.9	45.1	11.6	56.7

のように，ほとんどの者が「変わらない」か，あるいは「やや下がりぎみ」の未来を予想していた。

しかも，表9の結果が示すように「今後，学歴の値うちが上がると思えない」という見方は，学年や性別，学業成績，つきたい仕事などの属性に関係なく，高校生の間に広く定着している。

したがって，生徒たちは大学へ入学したからといって，明るい未来が約束されているとは信じていないのは確からしい。それにもかかわらず，生徒たちはなぜ大学進学を志すのか。そうした考察は，もう少し後に譲り，その前に先回りをして，大学生になったらどのような生活が始まると思うかを尋ねた結果を示すと，表10の通りになる。

① ふえる時間＝遊ぶ時間，本を読む時間，友だちと話し合う時間

② 今とあまり変わらない＝睡眠時間，テレビを見る時間

③ 減る時間＝勉強時間

表10　大学生になってからの生活

(%)

	ふえる				今と変わらない	減る			
	とても	かなり	やや	小計		やや	かなり	とても	小計
①遊ぶ時間	23.8	21.8	26.4	(72.0)	17.6	5.4	2.5	2.5	(10.4)
②本を読む時間	14.7	24.5	32.2	(71.4)	21.5	3.1	1.6	2.4	(7.1)
③友と話し合う時間	12.7	25.3	30.5	(68.5)	26.2	3.5	0.9	0.9	(5.3)
④睡眠時間	8.7	8.1	19.6	(36.4)	42.6	14.3	3.8	2.9	(21.0)
⑤テレビを見る時間	6.8	6.5	19.2	(32.5)	36.3	16.6	9.1	5.5	(31.2)
⑥勉強時間	6.7	8.9	19.8	(35.4)	24.3	18.6	11.5	10.2	(40.3)

1960年代後半のいわゆる学園紛争を契機として，欧米，特にアメリカの大半は変貌をとげたといわれる。社会人を対象としたコースの比重が増し，それと並行して門戸の解放が進んだ。しかし，入学しやすくなったことは，半面において努力をしないと卒業しにくい大学へ変貌したことを意味する。もともとそれ以前でも，欧米の大学生が数単位をとるために，何十冊かの本を読むのはよく知られた事実であろうが，日本の大学は世界の動向に逆らって，紛争以降，レジャーランド化の傾向を強めている。そうした現実を考えると，大学へ入学できたらもう少しのんびりとした生活が送れるだろうと考えるのも無理からぬ気がしてくる。

2．進学先を考える基準

1）　一流大学への入学可能性

難易度を基準に大学選択

このように生徒たちは大勢のおもむくままに，いわばムードとして，大学進学を考えている。

表11に示したように，大学進学にあたってとりあえず，①入学の難易度，②授業料の安さ，③就職状況などが，選択理由となるらしい。しかし，本サンプル中には，大学進学を遠い将来のことと思っている1年生と，半年後に入試を控えた3年生とが含まれているので，大学選択に際しての学年別の差異に着目して集計し直すと，表12のような結果が得られる。

① 1年生たちの方が，大事に考える条件＝入学の難易度，月謝の額，就職状況，

② 2年生が，もっとも大事に考える条件＝受験科目，大学の知名度

③ 3年生が，もっとも大事に考える条件＝教授スタッフ，大学の伝統，通学距離の近さ

つまり，高1の時は入学の難易度や就職状況など「大学案内」に書いてあるような

条件を考慮してばく然と進学先を定め，高2になると，受験科目などを調べ始める。そして，高3になり教授スタッフや大学への距離などを配慮し，きめこまかく志望校を決定するというプロセスである。

表11 大学選択の理由

(%)

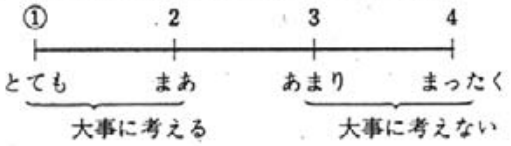
	大事に考える			大事に考えない		
	とても	まあ	(小計)	まあ	とても	(小計)
①入学の難易度	36.3	38.0	(74.3)	17.7	8.0	(25.7)
②授業料の安さ	32.9	41.2	(74.1)	17.1	8.8	(25.9)
③卒業後の就職状況	31.2	42.2	(73.4)	17.5	9.1	(26.6)
④教授陣の質	23.1	34.1	(57.2)	29.9	12.9	(42.8)
⑤受験科目	18.6	34.2	(52.8)	33.0	14.2	(47.2)
⑥世間的な知名度	18.0	47.7	(65.7)	26.0	8.3	(34.3)
⑦その大学の伝統	15.6	36.2	(51.8)	32.3	15.9	(48.2)
⑧大学との距離	13.7	25.7	(39.4)	30.0	30.6	(60.6)

表12 大学選択の条件—学年別推移

(%)

	アイテム	高1		高2		高3
学年が上がるにつれて	教授スタッフ	19.7	<	23.8	<	25.5
	大学の伝統	13.6	<	16.1	<	17.1
	通学距離の近さ	12.2	<	13.6	<	15.2
学年が下がるにつれて	入学の難易度	40.9	>	39.1	>	31.7
	月謝が安い	35.8	>	34.1	>	31.6
	就職状況が良い	34.0	>	31.5	>	30.0
2年生	受験科目	18.4	<	21.7	>	17.5
	世間的に名が知れている	14.1	<	22.2	>	18.6

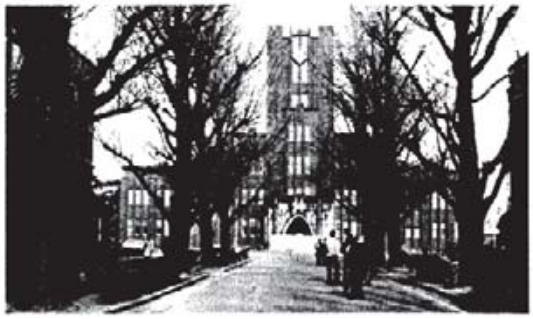
注） 表中の数値は全体の中で○の占める割合



東大はとても無理77.8%

それにしても，本サンプルは，各県でトップ・ランクの高校，およびそれに準ずる高校へ入学した生徒たちであるから，とりあえずいわゆる一流大学への入学を志すものが多いと思われる。

そこで,「仮に，あなたが以下のような大学（学部は，あなたの志望する学部)を受験したら，入学できると思いますか」と尋ねてみた。



その結果は，表13のように「ぜったい無理だと思う」と，入学を断念している者が，「東大や京大」で77.8%「一橋大や東工大」で64.3%，「早大や慶大」で56.4%に達した。そして，それらの大学へ入学できるだろうと信じられる生徒は，数%にすぎなかった。

しかし，大学入試の事情が明らかとなる高2や高3ならばともかく，高校1年生の段階から一流大学進学を断念することはないのではないか。そうした気持から，学年別の入学見通しを調べてみた。

さすがに「入学はぜったい無理」と考えている生徒の割合は，高校3年生がもっとも高い。しかし，それ以上に注目をひくのは，入学したばかりの高校1年生の81.1%が，すでに入学はむずかしいと思っている事実であろう。本調査を実施したのは，2学期の初めである。したがって多くの学校で，1学期の中間と期末試験を実施した時期になる。すでにふれたように，本サンプルは小・中学生時代，良い成績をとってきた者たちであり，志望していた高校にも入学できた高校生である。したがって，希望にあふれて高校生活のスタートを切ったはずなのに，2回の定期テストを受け，その結果が思わしくないので，すでに一流大学入学はとても困難だとあきらめの境地に達したのであろうか。

なお，学校別の集計結果によると，9校の中ではいわゆる一流大学の進学率がもっとも高いD校の生徒の断念率は80.1%で第2位のG校が82.2%，それに反し，進学率がかならずしも高いとはいえないF校は，42.5%であった。こうしたことを考慮すると，いわゆる学力優秀の生徒たちの集まる高校では，競争が激しいだけに，希望を抱く子もいる反面，断念する生徒も多くなるのかもしれない。

表13　一流大学を受験したら入学できるか　(%)

	たぶん入学できる	まあ入学できそう	ちょっと無理かもしれない	ぜったい無理だと思う
①東大や京大	4．2	3．2	14．8	77．8
②一橋や東工大	7．3	6．7	21．7	64．3
③早大や慶大	7．1	10．8	25．7	56．4

表14　東大や京大を受験したら入学できる

(%)

	たぶん入学できる	まあ入学できる	ちょっと無理かもしれない	ぜったい無理だと思う
① 高1	2．9	1．7	14．3	81．1
② 高2	2．3	3．6	17．6	76．5
③ 高3	1．7	2．8	13．0	82．5

どんなに努力をしても無理が49.2%

このように，トップ・ランクの高校の生徒でも，半数以上が，一流大学への入学を断念していた。しかし，灘高や麻布高のような超一流高校を除けば，県レベルの高校で，一流大学へ入れると思う生徒の割合が，ほぼ1～2割というのは，妥当なところなのかもしれない。

しかし，入学の可能性をぎりぎりまで考えてみる意味で，もう一問「それでは，これから夢中になって頑張り，一浪位したらそれらの大学へ入学できると思いますか」と尋ねてみた。表15に示したように「一浪して頑張ればなんとかなる」と答えた者の割合は，表13より2～3倍ほど増加している。しかし「頑張っても，ちょっと無理かもしれない」と反応した生徒も5割を上回っている。

そこで,「東大や京大」を例にとって，表13と表15との関連を考察すると，

① なんとか入学できそう…… 7%
② 一浪すればなんとかなる……16%
③ 努力をしてもちょっと無理……28%
④ どうやってもとても無理……49%

となり「早大や慶大」については，①18%，②29%，③26%，④27%となる。

ややくどい感じがしないではないが，あらためて,「一浪して頑張れば」についての学年別の集計結果を示すと，表16のようになる。

表15　一浪したら入学できるか

(%)

	たぶん入学できる	まあ入学できそう	ちょっと無理かもしれない	ぜったい無理だと思う
①東大や京大	11．5	11．7	27．6	49．2
②一橋や東工大	14．9	20．3	27．0	37．8
③早大や慶大	21．4	25．7	25．7	27．2

この中で，留意したいのは，

① 1年生の中でどう努力しても入学は無理だと考える者が48.6%に達する。

② 2年生になると，努力を重ねたせいか入学の見通しは，やや明るさを増す。

③ しかし，受験が近づくにつれ，頑張ってもとても無理だと思う3年生が6割を越える。

であろう。

表14と表16とを関連させ，「東大と京大」に例をとって，入学可能性の学年別推移をまとめると，

① なんとか入学できそう。　5%→6%→4%

② 浪人をすればなんとかなる。　14%→23%→10%

③ 努力をしても，ちょっと無理。　32%→27%→24%

④ 努力をしても，とても無理。　49%→44%→62%

（高1 →高2→高3の順）

のようになる。

表16　一浪して東大や京大を受験したら

（%）

	たぶん入学できる	まあ入学できる	ちょっと無理かもしれない	ぜったい無理だと思う
① 高1	8．9	10．3	32．2	48．6
② 高2	13．7	14．9	27．3	44．1
③ 高3	4．2	10．7	23．5	61．6

現在，小学校高学年の中で学習塾通いする子は3割を越えるといわれる。また，中学生の塾や予備校通いは4割に達する。したがって，多くの高校生たちは小学生の頃から学習塾へ通い，毎日何時間かの家庭学習をして，高校合格の時を迎えたのであろう。その結果，あこがれの高校へ合格できた。しかし，一学期の中間試験で中以下の成績をとる。しかも，一度だけならともかく，勉強をしたはずなのに期末試験の点数も良くない。となると，小・中学生時代，良い成績をとっていただけに悪い成績をとったことの衝撃は強烈なものとなる。そして，「とても駄目だ」と，戦意を喪失していく。そうした生徒が，全体のほぼ半数を占めているのであり，これに「半ば断念組」を加えると，戦線離脱者は8割に達する。

自信を持っているのは上位1割だけ

こうした指摘が決して誇張でないことは，表17の結果にもあらわれている。「一浪して頑張ったら入学できる」と思える生徒は，成績が上位から1割の生徒に限られ，上位から1/3程度の生徒で希望を抱ける者は27%にすぎなくなる。

表17　今の成績と東大や京大への入学可能性

(%)

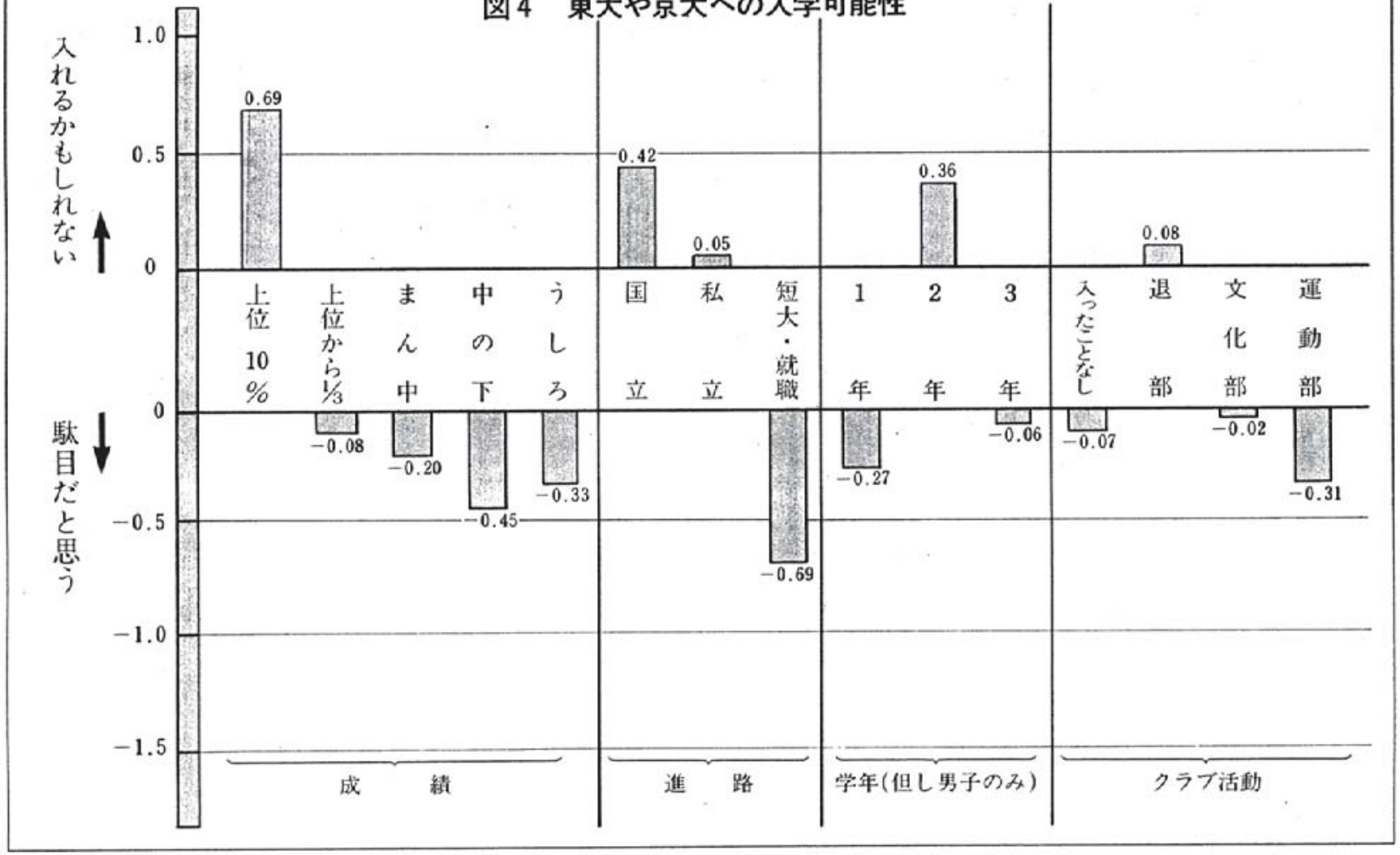
入学可能性 / 今の成績	現役				一浪をしたら			
	たぶん	まあ	ちょっと	ぜったい	たぶん	まあ	ちょっと	ぜったい
	入学できる		無理		入学できる		無理	
①上位の10%まで	10.9	9.3	28.1	51.7	26.4	19.5	24.2	29.9
	20.2		79.8		45.9		54.1	
②上位から1/3	2.7	3.0	20.1	74.2	11.8	15.2	31.4	41.6
	5.7		94.3		27.0		73.0	
③まん中位	2.3	1.7	12.7	83.3	8.5	9.8	29.5	52.2
	4.0		96.0		18.3		81.7	
④中の下位	1.9	1.6	10.4	86.1	7.2	10.9	29.3	52.6
	3.5		96.5		18.1		81.9	
⑤うしろの方	5.9	3.1	10.1	80.9	10.6	7.6	22.7	59.1
	9.0		91.0		18.2		81.8	

なお，「東大や京大」へ入学できると思える意識について，数量化II類を用いて，規定要因の分析を試みると，図4のような結果がえられる。図4は図3と提示の仕方を変えているが，意味するところは変わらないので，さっそく結果の解釈へ移ろう。数量化II類は，カテゴリー・スコア（図中の数値）を加算できる性質を備えているのでその性質を生かして大学進学へ希望を持っている生徒と，まったく断念している生徒のプロフィールを描くと以下のようになる。

① 希望に燃えている生徒＝成績がトップクラスで，国立大学志望の2年生。進学を考えて，最近クラブをやめた生徒。

② まったく断念している生徒＝成績が中の下程度の1年生で，運動部に所属し，将来，就職や短大・専修学校への道を考えている生徒。

図4　東大や京大への入学可能性



2） 進路選択のタイプ

17の設問項目

今まで，いわゆる一流大学の受験を想定して進学意識の考察を進めてきた。しかし，実際の進路選択にあたっては，さまざまな要因が作用しよう。

高校生たちの進路選択については，本モノグラフでも，いずれ機会をみてより詳細な考察を試みる予定であるが，ここでは，一つの試みとして状況を設定した質問文を用意し，それに二者択一の回答を提示して，反応を求める形の調査方法をとることにした。

やや長文にわたるが，のちの分析に必要となるので，設問文の全体と回答例，および，回答の%を紹介しておきたい。なお，設問は17から構成され，それぞれまったく別個の内容を尋ねている。

【進路選択に関する調査項目】

次の質問は「もし，あなたがN君だったら」という質問です。次にあげたような時，あなたならどうしますか。①～⑰それぞれについて，ぼく（わたし）ならこうする，あるいはこうするだろうと思う方に○をつけてください。

① 高３理科系志望のＡ君。模試で理科，数学が下がり，国語，社会の点数がグーンとアップ。もしあなたがＡ君だったら。

1．（25.0%）文系に志望を変える
2．（75.0%）志望を理系のままにする

② Ｂ大学Ｂ学部にどうしても入りたいＢさん（高３）。入試要項を調べたら，自分の不得意な科目がありました。もしあなたがＢさんだったら。

1．（23.3%）その学部の受験をあきらめる
2．（76.7%）その学部を受験する

③ すべり止めのＣ大学にしか合格しなかったＣ君。もしあなたがＣ君だったら。

1．（64.1%）浪人して来年に期する
2．（35.9%）Ｃ大学に入る

④ 東京の有名私立大学と地元の国立大学にめでたく合格したＤ君。もしあなたがＤ君だったら。

1．（29.7%）東京の有名私立大学に進学する
2．（70.3%）地元の国立大学に進学する

⑤　電子工学志望のE君。合格したのは○×電子工学院(専修学校)と電子工学科のないE大学の工学部。もしあなたがE君だったら。

1．（64.9%）○×電子工学院に進学する
2．（35.1%）E大学に進学する

⑥　開業医の一人息子のF君。お父さんは医学部に進むことを望んでいますが，自分はどうしても文学を勉強したいと思っています。もしあなたがF君だったら。

1．（14.9%）医学部をうける
2．（85.1%）文学部をうける

⑦　国立大志望のG君。模試の判定では，G大学はちょっと無理。でも担任の先生は「君ならだいじょうぶ」といっています。もしあなたがG君だったら。

1．（87.5%）G大学をうける
2．（12.5%）志望校のランクを下げる

⑧　地方在住のHさん(女性)。いきたい学部は地元の大学にありません。でも両親は，地元の大学をすすめています。もしあなたがHさんだったら。

1．（25.0%）地元の大学に行く
2．（75.0%）志望学科のある大学に行く

⑨　東京の大学へ行き，下宿生活をしてみたいI君。でも，両親は仕送りはできないといっています。もしあなたがI君だったら。

1．（63.6%）アルバイトをしてでも東京の大学に進む
2．（36.4%）両親に従って地元の大学に進む

⑩　東京の大学に進みたいJ君には，3年間交際の続いているM子さんがいます。でも，M子さんは親元を離れることができません。もしあなたがJ君だったら。

1．（86.8%）東京の大学に進む
2．（13.2%）地元の大学に進む

⑪　ある私立大学を受けたI浪のKさんは，からくも補欠。寄付金50万円出せば補欠入学できます。両親は出してもいいと言っています。もしあなたがKさんだったら。

1．（60.1%）補欠入学する
2．（39.9%）その大学への入学はあきらめる

⑫ 文学部志望のL君。しかし両親は将来のことを考えて，法学部か経済学部に進むようにすすめます。もしあなたがL君だったら。

1．（77.4%）文学部にすすむ
2．（22.6%）法あるいは経済学部にすすむ

⑬ 四年制大学に進学したいMさん。でも両親は婚期の遅れを心配して短大をすすめます。もしあなたがMさんだったら。

1．（81.7%）四年制大学にすすむ
2．（18.3%）短大にすすむ

⑭ 大会を前に練習にはげむ野球部のエースN君。でも入試をひかえ受験勉強もしなければなりません。もしあなたがN君だったら。

1．（26.8%）部をやめて勉強する
2．（73.2%）練習を続ける

⑮ 成績も同じ位の仲よし3人組のO君たち。二人の友だちは，第一志望の大学に入れたのに，O君だけは，第三志望の大学にしかうかりません。もしあなたがO君だったら。

1．（55.6%）浪人して来年に期す
2．（44.4%）第3志望の大学に進む

⑯ 同じ大学の英文学科にめでたく合格した仲よし3人組のPさんたち。Pさんだけ，ランクの上の大学の英文学科にも受かりました。もしあなたがPさんだったら。

1．（20.7%）他の二人と同じ大学に行く
2．（79.3%）一人だけ，ランクの上の大学に行く

⑰ 三年生のQ君のクラスで，今度の日曜日にハイキングに行くことが決まりました。でもその日はQ君の行っている進学塾の模試の日。もしあなたがQ君だったら。

1．（53.5%）ハイキングに行く
2．（46.5%）模擬試験に行く

自分の意志を貫く態度が目立つ

これら17の設問に対する反応の中で，目につくのは，⑥「父親の勧める医学部をけって，文学部を志願する」，⑧「両親のすすめる地元大学をけって，志望学科のある大学を受ける」，⑨「アルバイトをしても東京へいきたい」，⑬「婚期の遅れを心配する両親をふりきって，4年制大学へ」など，受験にあたって，自分の意志を通そうとする態度が強い点であろう。「すべりどめの大学にしか入れなかったら，一浪しても望みを通したい」（③）や「電子工学科のない大学より専修学校を選ぶ」（⑤），「つきあっているM子さんとの仲が悪くなっても，東京の大学へ」（⑩）などの反応にも，受験は一生の大事なのだから，自分の考えを大事にしたいという意気込みがあらわれている。

しかし，こうした考察はあくまで，サンプルの中で過半数の者がどう考えているかの問題であり，数は少ないとはいっても，親の意見などの周囲の判断を尊重して受験する生徒がいるのも確かである。

そこで，どのようなメカニズムが進路選択に働いているのかを明らかにするために，数量化Ⅲ類を利用して分析を行うことにした。

数量化Ⅲ類の詳細は別の機会に譲りたいが，この方法は，統計的な距離に着目して，調査アイテムのカテゴリーをグループ化するもので，ここでは先に引用した17アイテム，計34アイテム・カテゴリーを分析対象とした。

数量化Ⅲ類では，いくつかの軸にしたがって分析を進めていくことになるが，Ⅰ軸からⅢ軸までのカテゴリー・スコアは，表18の通りである。この中から軸の意味を探るために，カテゴリー・スコアの絶対値の大きな6項目を選んで抜き出してみよう。

●Ⅰ軸のマイナス

①	15－1	浪人しても初志貫徹	－1.507
②	3－1	すべりどめをけって一浪	－1.232
③	9－1	アルバイトをしても東京へ	－0.999
④	12－1	親のすすめをふりきり文学部へ	－0.784
⑤	13－1	親が反対しても4年制へ	－0.736
⑥	7－1	模試で不利でもG大へ	－0.662

●Ⅰ軸のプラス

①	7－2	模試の判定に従う	3.773
②	10－2	恋人のいる地元の大学	3.237
③	13－2	親のすすめる短大へ	2.554
④	12－2	親のすすめる法学部へ	2.255
⑤	3－2	一浪するよりすべりどめへ	2.010
⑥	15－2	第三志望の大学へ	1.702

●II軸のマイナス

①	16－1	友といっしょに1ランク下へ	－2.674
②	3－2	とりあえずC大へ	－1.538
③	15－2	友といっしょに第三志望へ	－1.370
④	11－2	寄付金のある大学をやめる	－1.201
⑤	5－1	志望する専修学校へ	－1.072
⑥	17－1	模試よりハイキング	－0.994

●II軸のプラス

①	6－1	親のいう医学部へ	3.411
②	14－1	部をやめ勉強	2.549
③	12－2	将来を考え法学部か経済学部	2.258
④	5－2	専修学校より工学部	1.782
⑤	4－1	地元より有名な私立大	1.646
⑥	15－1	浪人してでも来年に	1.213

内容からうかがえるように，I軸のマイナスは自分の意志を貫徹する。プラスは，状況に応じて進路を考える態度を意味している。また，II軸のマイナスは，進路選択にあたって情緒的な要素を重視することを，そして，プラスは将来を考えて合理的な思考をとることを意味している。

そこで，2つの軸をかけ合わせてグラフを作ると，図5の通りとなる。なお，図中にはI軸，II軸とも上位6つのアイテム・カテゴリーを抜きとってマークし，その他のカテゴリーは省略してある。

4つのタイプ

軸の意味に着目して，各々の象限について解釈を加えると，以下の図のように，読みとりが可能であろう。なお，図5の上に学業成績や将来の進路，学年などのサンプルスコアを乗せたのが図6である。

(1) 一流大学志向型＝すべりどめの大学をけってでも，なんとしても目標の一流大への入学を志向している生徒で，全体の中に占める割合は約2割である。成績がよく，将来専門職へつきたいと考えている生徒である。

(2) バランス型＝本人の意志を通しながらも，かならずしも高望みをしていない生徒で，全体の4割を占める。成績が「中位」あるいは「中の下」で，サラリーマン志望者が多い。

(3) あきらめ型＝とにかく，大学へ入れれば良いと思っている生徒で，3割を占める。成績が下位の生徒が多い。

(4) 見えっぱり型＝大学とか学部とかの格を大事にする生徒で，全体の中で占める割合はほぼ1割である。

表18　数量化III類によるカテゴリー・スコア

アイテム	カテゴリー	サンプル	I 軸	II 軸	III 軸
設問15	1	2430	−1.507	1.213	1.256
3	1	2841	−1.232	0.943	1.219
9	1	2787	−0.999	−0.426	−0.548
12	1	3399	−0.784	−0.786	−0.386
13	1	3557	−0.736	−0.174	−0.399
7	1	3898	−0.662	0.049	−0.114
10	1	3805	−0.661	0.184	−0.443
5	1	2861	−0.579	−1.072	−0.123
17	1	2336	−0.578	−0.994	−0.434
4	1	1324	−0.570	1.646	−1.698
11	1	2631	−0.335	0.891	−1.487
6	2	3915	−0.261	−0.581	0.126
8	2	3491	−0.259	−0.238	0.119
14	1	1174	−0.236	2.549	−0.554
2	2	3559	−0.235	−0.254	0.910
1	2	3483	−0.167	−0.113	0.935
16	2	3676	−0.050	0.659	−0.087
14	2	3408	0.081	−0.878	0.191
16	1	906	0.204	−2.674	0.357
4	2	3258	0.231	−0.669	0.690
11	2	1951	0.451	−1.201	2.005
1	1	1099	0.529	0.358	−2.964
17	2	2246	0.601	1.033	0.450
2	1	1023	0.818	0.884	−3.165
8	1	1091	0.828	0.762	−0.381
5	2	1721	0.963	1.782	0.205
6	1	667	1.536	3.411	−0.740
9	2	1795	1.552	0.662	0.851
15	2	2152	1.702	−1.370	−1.418
3	2	1741	2.010	−1.538	−1.989
12	2	1183	2.255	2.258	1.111
13	2	1025	2.554	0.607	1.386
10	2	777	3.237	−0.901	2.172
7	2	684	3.773	−0.282	0.654

注）設問ナンバーは本文に紹介したナンバー，カテゴリーも本文参照。

図5　進路選択のカテゴリー・スコア

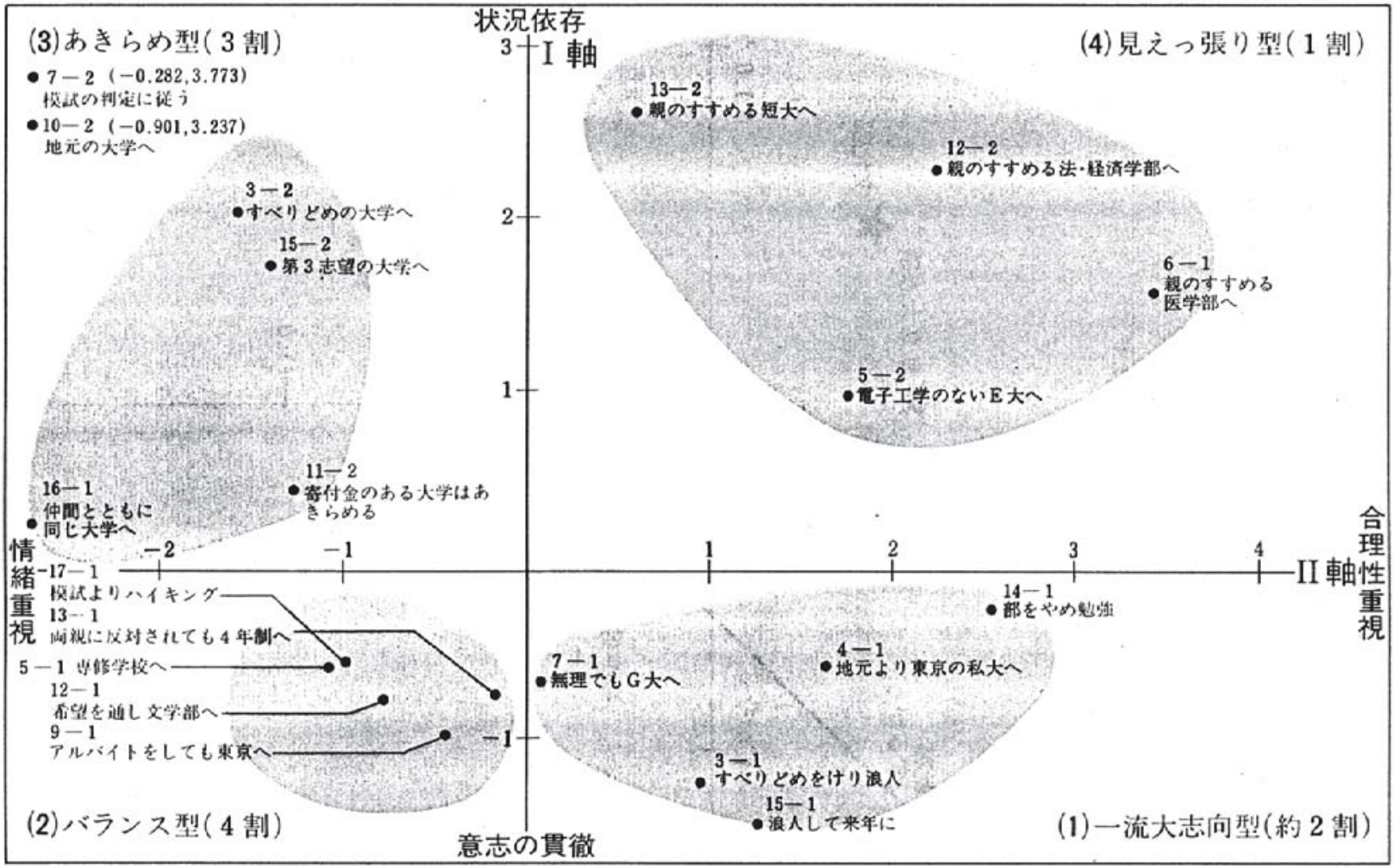
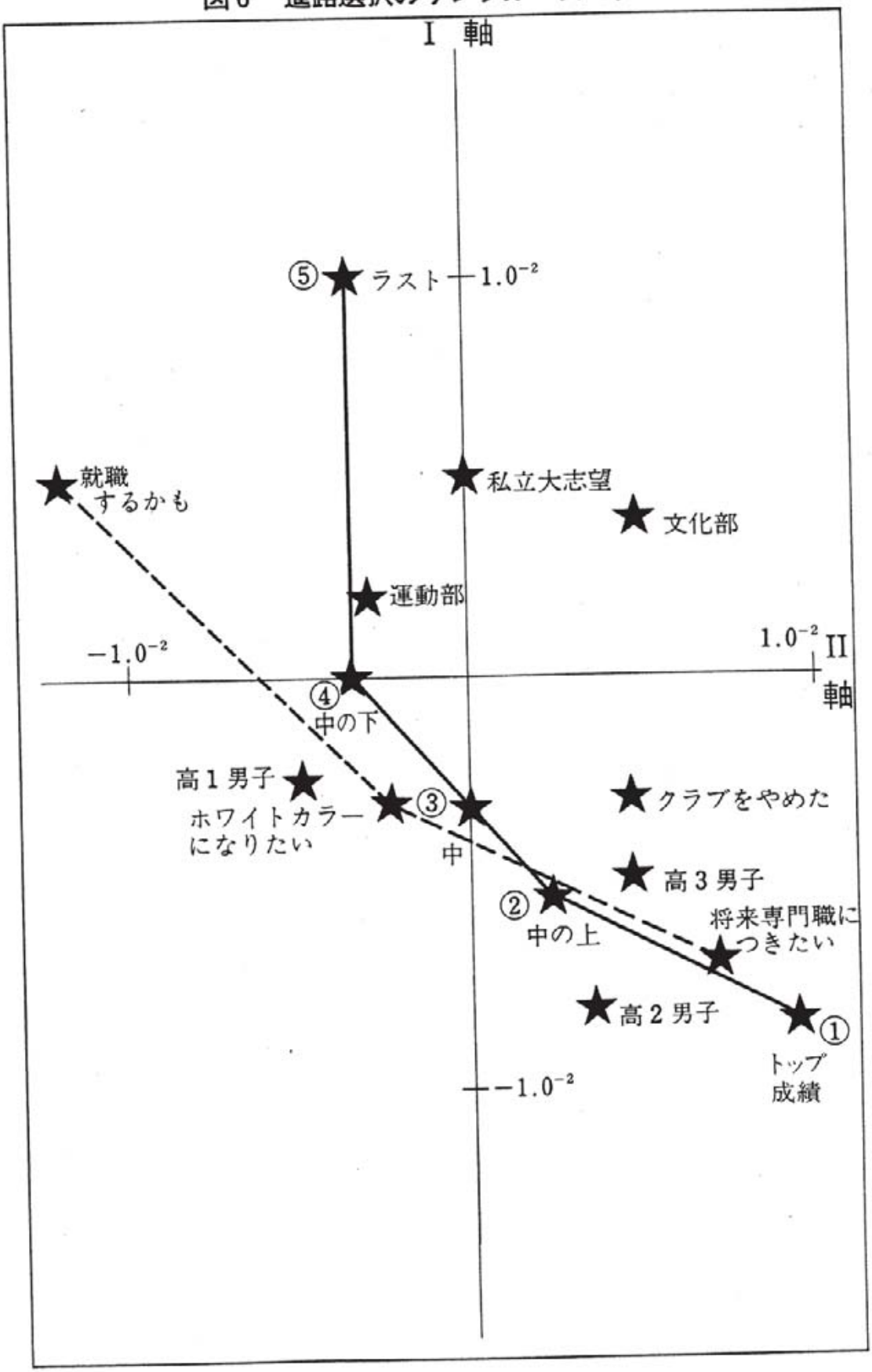


図6　進路選択のサンプル・スコア



そして，成績および将来つきたい仕事のサンプル・スコアから明らかなように，全体としては，右下から左上へかけての形で，サンプルが分布している。そして，左上へ進むにつれて，進学の意欲が薄れていく。